

「先生、ええ加減、早う参らせてほしいわ」。98歳になる、ひでさんは、そう言っしてわくわくの笑顔を見せた。訪問診療を重ねる水原寺診療所（滋賀県東近江市）の花戸貴司医師（42）は、笑みで受け止める。

「おばあちゃん、口から食べられなくなったらどうする？」「病院に行きたい？」と毎回のよう確認する。

「どっこも行かんわ。家におろ」と、ひでさんは答えた。

ひでさんには、脊髄小脳変性症という進行性の難病を抱えるひ孫娘のなるちゃんがいた。成人を迎える年ごろになった、そのなるちゃんを1年ほど前までひでさんが介護していた。

やがて、ひでさんの身体もさすが

命のバトンリレー

奇跡と神秘の積み重ね

に自由がきかなくなり、寝たきりになる。笑顔の写真を撮らせてもらってから数日後、ひでさんの意識は速のき、生死の境をさまよった。同じころ、なるちゃんも病状が悪化して意識不明に陥り、救急搬送されていた。

それから数日して、ひでさんは旅立った。同じころ、危篤だったなるちゃんは一命をとりとめた。

「あんたはもったときばって、長生きせなあかんでえ」。ひでさんが代

くにもり・やすひろ
写真家、ジャーナリスト

國森 康弘



昭和49年、神戸市生まれ。京都大学院経済研究科修士課程修了。神戸新聞社記者を経て独立。イラクやカンボジアなど紛争地や経済貧困地域で取材を重ね、現在は滋賀県内で看取りや在宅医療の撮影に力を入れている。最新刊に写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』（全4巻、農文協）。

々受け継ぎ、自身も長年蓄えてきた生命力とあふれんばかりの愛情を、なるちゃんに受け渡して逝った、その証のようみえた。

人は、ほかの生き物と同じように、いつか必ず死ぬ。死ぬからこそ、種を保存するために子孫に遺伝子を引き継いでもらい、「命のバトン」を託す。

自分の命は、授かりもの。両親から授かった。両親は4人の祖父母か

恋ちゃんに送られる竹子さんのように、人は「命のバトン」を託して行く

滋賀県東近江市



ら、祖父母は8人の曾祖父母から…。20代さかのほれば、単純計算で100万人を超える。先祖様のバトンリレーの先頭に、自分は立っていることになる。

もし、100万人のうち1人でも、全く別のタイミングで亡くなっていたら、あるいは自死したり殺されたらしていたら、自分はこの世に存在しなかったらどう。奇跡と神秘の積み重ねを思う。

天寿をまっとうし、命と愛情を受

け渡していくことが、生き物として人間として、何より大切なことではないか。「戦争」や「貧困」、「事件事故」といった「人災」の現場で、天寿をまっとうできない死を目の当たりにし、強く思うようになった。バトンを引き継いでいく「看取り」の現場に居合わせて、それは確信に近づいた。

小学5年だった恋ちゃんは、ある朝目覚めたら、大好きだった曾祖母の竹子さんが息を引き取った、と聞かされた。

毎日、学校の行き帰りに笑顔を見られた。おばあちゃん。誰かに叱られても、いつもかはってくれる「絶対的味方」だった。最近では恋ちゃんの名前を忘れるようになった。1週間前からは自分で入れ歯を外して、食べ物をお口にせず、寝込んでいた。だから、どこかで悲しい予感を感じていた。

亡くなったおばあちゃんに触れたら、驚くほど冷たい。いっぱい泣いた。手を握り、足をさすった。おっきな「すわりだ」があった。「おばあちゃん、今まで恋に優しくしてくれて、ありがとう」。ほっぺにキスをした。恋ちゃんも「バトン」を受け取った。

命のバトンをリレーする機会は、人生において、そうない。出産のときと、大切な人を看取る時、そして自分が死ぬときだ。「わたしもおばあちゃんみたいに、優しいおばあちゃんになれるかな」。恋ちゃんも、また、なるちゃんも、いつかは立派な「先祖様」になる。